

初期浮世草子 I

色乃海衣

并、好色染下地・華の染分

古典文庫

初期浮世草子 I

色乃海衣

并、好色染下地・華の染分

古典文庫

目次

凡例	三
色の染衣	四卷四冊 貞享四年版 五
好色染下地	五卷五冊 元禄四年版 二七
華染分	一・二・三冊 元禄年版 二七
所収本書誌	二九

凡 例

一、所収本の翻刻にあたり、底本に忠実にと努めたが、印刷上の都合で、大体次のようにした。

イ、漢字・仮名の別、漢字の異体・略体文字の表記等は、概ね現在ある活字体に従った。

但し、漢字表記の中には「万」「萬」の如き、原文で両用されているものはそのまま。他に、現行活字にはないが、作字のできるもの、例えば、「嫵」(こしもと)・「喧嘩」(けんくわ)、「奨束」(しょうぞく)などは、表記のままとしたが、「出」「地」「文」「葉」などの漢字に濁点が施されているものは、その濁点を除外した。

また、原文の仮名の表記「ミ」「ハ」「ニ」などは、そのままを用いた。その他、「こと」「より」など合字は、二字に分けた。

ロ、仮名遣い・清濁・振仮名・踊り字・句点など、すべて底本のままとした。

ハ、挿絵はすべて、所定の位置の組版近くに挿入した。

ニ、翻刻文には、すでに版行されている複製本の本文との対照を考えて、底本の丁移りに、版心に施された丁付によって、丁数を記した。オ・ウは表・裏の略号。

ホ、底本の破れ、印刷不鮮明、または虫喰いによる不明箇所には、した。
ヘ、原文の誤刻と思われる箇所には、その右傍に（ママ）印を付けた。

ト、「好色染した地目録」における、黒丸の中の、京・江戸・伊勢の白ぬきの文字は、（京）・（江戸）・（伊勢）で表わした。

一、本書所収の『色の染衣』の原文には、句読点が全く施されておらず、その通りに活字を並べ組むと、非常に読みにくく、加うるに清濁の付け方もまちまちである。仍て、読点を施す代りに、適宜、句文ごとに一字あきに組んでみた。

一、終りに臨み、底本の翻刻を御許可下された大東急記念文庫・東洋文庫・京都大学文学部に対して、深謝申上げる。

昭和六十三年一月

色 乃 染 衣

貞享四年八月版

大東急記念文庫藏

色の染衣
(書外題)

原蜀山人藏書也 此ぬし 柳亭種彦

全四冊 合本

貞享四年印本

作者 松月堂不角
法橋

画人 鳥居庄兵衛清信

(以上、墨所)

(表紙)

目錄

くさくさ海の底

佛と恵とかげりる世や

やまのてゑあゆむなり

女とくハ内まゐる世や

やまのてゑあゆむなり

新ねとあまのりる世や

浪は世のてゑ川

みちとくてあまのりる世や

黒く入るる人緑まね馬

閑とまゐるやあまのりる世や

あまのりる人上の他言

水府の情さしあまのりる世や

いふべしとてふべし
 買ひ取りの事とまねくの事や
 ぬぐいあまは百貫の男氣
 稲荷の告も海のない世や
 けむむ様もあつたの世や
 作ぐもあつたの世や
 様替へ侍つたと角田川
 まやうもあつたの世や
 是ういふもあつたの世や
 まやうもあつたの世や
 碓氷の陣もあつたの世や
 美濃の陣もあつたの世や

色の染衣

目録

鼓からなつたわか衆

佛と恋とかゆる憂世や

やまひして恋になり

女といふハマれな浮世や

心中のぬけがら

龜相そきうも直ねのする憂世や

浪ハ此世の境川

死にたくて死ぬ浮世や

思ひのきつなには縹つなハれぬ馬

泪を置ミやげ見えた憂世や

やどりハ身の上の他言ひとごと

水餅の情きえ懸る命浮世や（一オ）

小ゆびをしほる硯水

買懸りの思ひもきれくの憂世や

ふどしあれバ百貫の男氣

稻荷の告も錢のない浮世や

つぼむ桜に散る心の花有

御くじも合てつらき憂世や

様替さまて倅かけうつす角田川

きやらに眠る蝶の浮世や

岡の澤木に残た片袖

無常ハ乗合の追風是も憂世や

壁ひとへ隣りハをそろしや地獄

夢ハ昏袍にさけし浮世や（二ウ）

鼓つゝからなつた若衆わかしゅ

華はなといふ色いろに枝を剪きれ 香といふくせものに人を呼 爰こゝに近江国あふみのくに三井
寺のほとり金澤山きんたくさん樂寿院らくしゅあん福蔵寺とかや 名にめでゝかたのごとくのお
く僧 いつを師走しはすぞ 納豆なたうのしこミも人にまかせ 盆ぼんすぐれハ冬のく
ばり茶をもつゝミおき 入相もあけ六きくツに聞なし 凡をよそ一日に十兩つか
い迄は 三百年生いきてもへらぬ方丈の長持 あくれば四条の治郎やちうに心を
かよハし くるればこちへかけらうをまねき おもしろおかしきところ
の月 わかれにはよい物袖にいらていなすゆへ 御氣にいつた治郎や
かげらう京しよ寫あはせの袷あはせに 甚三もミのうら似にせさごじゆにいれ 鮫さめの脇さめざ
し指さしたも 黒羽二重ふたへに本もミ金きんつばの身代に成ぞかし されバかの手